Lesson

11

死とクリスチャンの希望

クリスチャンになって死がまったくこわくなくなったという方もいれば、正直なところ不安があるという方もいるでしょう。あなたは今どう思っていますか。死はだれにとっても未知なるものです。でもクリスチャンは死からの勝利を約束された存在であり、死を恐れる必要はありません。死とイエス様がくださる希望の約束について考えてみましょう。

この課で学ぶこと

1．私たちがいただいたもの

（1）死の恐怖からの解放

（2）永遠のいのち

（3）イエス様にお会いする希望

（4）イエス様への信頼

2．天国について

（1）神と顔を合わせてお会いする

（2）労苦から解き放たれる

（3）復活のからだをいただく

（4）完成した神の国

3．地上での別れ

（1）教会―グリーフケアの共同体

（2）クリスチャンの葬儀

（3）自死について

（4）終活

（5）他宗教の葬儀に参列することについて

●考えてみましょう

あなたは死をどのように感じていますか？

1．私たちがいただいたもの

（1）死の恐怖からの解放

「罪の報酬は死です」(ローマ 6：23)と書かれているとおり、死は人間が罪を犯した結果、この世界に入ったものです。イエス・キリストは十字架上で、私たちの罪の罰をすべて引き受けて下さり、復活によって死に勝利してくださいました。それは、「死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした」(ヘブル 2：14-15)。パウロは、「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決して」(ローマ 8：1)ないと言っています。イエス様のみわざのゆえに、クリスチャンはもはや死という罰を受けることはないのです。

（2）永遠のいのち

それは新しい霊のいのちをいただいたからです。「神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」(ローマ 6：23)とあるとおりです。永遠のいのちをいただいたクリスチャンは、もはや霊の死を味わうことはありません。けれども地上におかれている間、クリスチャンは、罪の影響のある地に住み、またその結果としての肉体の死を経験します。やがてイエス様が最後のさばきのために地上に来られ、新天新地が創造される時がきます。その時、「最後の敵として滅ぼされるのは、死です」(Ⅰコリント 15：26)とあるように、死はイエス様によって、完全に滅ぼされるのです。イエス・キリストの贖いによって与えられる救いは完成します。

（3）イエス・キリストにお会いする希望

イエス様が昇天されたとき、天使たちは弟子たちにイエス様が再びおいでになることを告げました(使徒 1：11)。彼らはイエス様に再会する希望をもって宣教の働きを続けました。これはすべてのクリスチャンに与えられている希望です。パウロは「祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの、栄光ある現れを待ち望むように教えています」(テトス 2：13)と言っています。

（4）イエスへの信頼

イエス・キリストを信じることによって、肉体の死の意味は変わりました。永遠の霊的いのちをいただいているゆえに、単なるターニングポイントになったのです。クリスチャンであってもこの地上で、痛みや悲しみ、また自分の罪が引き起こす苦しみを味わいます。死もその中の一つのチャレンジと言えるでしょう。死を通ることは、イエス様をより信頼することにつながります。私たちはどのように死を迎えるでしょうか。イエス様はマルタに聞かれました。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか」(ヨハネ 11：25-26)。主は私たちにも問いかけておられます。主をますます信頼してその時を迎えたいと思います。

2　天国について

黙示録にはこのように書かれています。「また私は、新しい天と新しい地を見た。以前の天と以前の地は過ぎ去り、もはや海もない」(21：1)。神様は、この地上を終わりにされ、新天新地をお造りになります。

そのことはイザヤも預言しています(イザヤ 65：17)。では約束されている天国、聖書では「新しい天と新しい地」と呼ばれているところはどのようなところなのでしょうか。すべてを知ることができませんが、聖書からいくつかのことを知ることができます。

（1）神と顔を合わせてお会いする

主の祈りで「天にます我らの父よ」と祈るように、天は神様がおられるところです。**「神は人々とともに住み、人々は神の民となる」**(黙示録 21：3)と書かれています。そこで私たちを愛してくださる主イエスと顔を合わせてお会いするのです。**「神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に仕え、御顔を仰ぎ見る」**(黙示録 22：3-4)と書いてある通りです。パウロは、主イエスに会うことが待ち遠しいあまり、**「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです」**(ピリピ 1：23)とまで言っています。

コラム

早く天国に行きたい！

ある末期ガンの女性は病院で周囲にこう言ったそうです。「早く天国にいってイエス様に会いたい！」あまりにも明るく言うので、医師や看護師が不思議に思い、ターミナルケアにかかわっていたチャプレンに「あの人は本気で言っているのでしょうか」と尋ねたほどでした。クリスチャンにとって死は終わりではない、イエス・キリストについにお会いできる時なのだ！パウロの心境です。本当に不思議なことですが、クリスチャンは死を恐れず喜びをもって死を迎えることが許されているのです。なんと幸いなことでしょうか。

（2）労苦から解き放たれる

黙示録はこのように書いています。「書き記せ、『今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである』と。御霊も言われる。『しかり。その人たちは、その労苦から解き放たれて安らぐことができる』」(14：13)。私たちは天国に今の労苦をひきずっていくことはありません。それどころか主は、願いつつも何もできなかった私たちに、「よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」(マタイ 25：21)と言ってくださり、報いをくださいます。「神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである」(黙示録 21：4)。私たちの地上での涙はすべてぬぐい取られ、喜びと平安があります。

（3）復活のからだをいただく

「キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます」(ピリピ 3：21)。その時、私たちは主イエスの復活のからだと同じからだをいただくことになります。それがどういうからだなのかははっきりわかりませんが、新しいからだには、病や老いがないことは確かです。「覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます」(Ⅱコリント 3：18)と書かれていることが、その時、成就するのです。

（4）完成した神の国

罪によってゆがめられてしまっていた天地は、イエス様が十字架の贖いによって神の国を修復されたことにより、完成に向かって確実に前進しています。「わたしはアルファであり、オメガである。最初であ

り、最後である。初めであり、終わりである」(黙示録 22：13)と書かれているとおり、新天新地が造られる時は、神様が創造して始められた神の国が完成する時でもあります。

3　地上での別れ

そうはいってもすべての人はこの肉体の死という通過点を通ります。そしてそれは、愛する人とのこの地上での別れも意味し、親しい人にとって大きな痛みとなります。

（1）教会―グリーフケアの共同体

教会は、愛する方を天に送られた方のご家族とともに悲しみ、ともに痛みを乗り越えてきました。グリーフケアの役割を担い、天国への希望を確認しあって歩んできたのです。

（2）クリスチャンの葬儀

クリスチャンの葬儀は、その方の地上での歩みが主の恵みに満ちていたことを知り、神様に感謝して神様を礼拝し、天での再会の希望を新たにする時です。

コラム

わたしのまことのふるさと

神学者 C.S.ルイスの書いたファンタジー、『ナルニア国物語』の第７巻「さいごの戦い」で、ルイスはナルニア国が終わり、新天新地が始まる場面を想像して描いています。ナルニア国と似て非なる新しい世界に足を踏み入れた一角獣は皆の声を代弁してこう言います。「ああ、わたしはとうとうもどってきた！こここそ、わたしのまことのふるさとだ！わたしは、もともとここのものだった。ここをわたしは、いままで知らずに、一生さがし求めていたのだ。」そして皆はもっと奥へと走り出しましたが、彼らは「いっこうにあつくもならず、つかれもせず、また息をきらせもしませんでした。」

葬儀でハレルヤコーラスを歌ってほしいと希望する方もいます。「また天国がにぎやかになりましたね」。クリスチャンは単なる気休めではなく、本心からそう言うことができるのです。

（3）自死について

キリスト教では自死は罪としてきた歴史があり、今も遺族は教会でも心の痛みを話せずにいることが多いようです。しかし聖書を見てみると、たとえばサムソンは自分のいのちを捨ててペリシテ人を滅ぼしましたが、ヘブル書で信仰の人として名を連ねています。カトリック教会も、暴行される前に自死して貞節を守った女性たちを聖人にしています。初代教会の時代、ローマ皇帝を主と告白せずに積極的に死を選んだ殉教者たちをどう考えたらいいのでしょうか。

それまで主を愛して歩んできた方が、なんらかの事情によって自死したら、罪に定められてしまうのでしょうか。それは聖書の主張とは相反しているように思えます。様々な立場がありますが、何よりも遺族に寄り添うことが大切です。教会や友人たちが口をつぐんでしまうことなく、亡くなった方にも主の赦しの愛は尽きないことを伝え、互いに慰め、希望を持ちたいと思うのです。

（4）終活

終活をしている方もおられるでしょう。エンディングノートを記しておくことは、どの世代の人にとっても大切です。自身の略歴、葬儀や埋葬に関する希望なども記しておくとよいでしょう。特にノンクリスチャンのご家族をお持ちの方は、教会で葬儀をしてほしいこと、教会墓地に埋葬してほしいことなどを書き記しておくと、いざという時に家族や教会の助けになります。

（5）他宗教の葬儀に参列することについて

他宗教の葬儀には出席しないようにする、積極的に参列して気持ち

を表すなど様々な考えがあります。クリスチャンはお焼香はさけるべきですが、その場でご家族への慰めを祈ることができます。大切なことは、神様の前にクリスチャンであることを大切にすること、悲しんでいるご家族に寄り添うことです。摩擦が起きそうなときには、教会やクリスチャンの友人に祈っていただいてください。

「メメント・モリ」、死を想えということばがあります。死を考えることは、私たちに今どう生きるかを問いかけてくれます。クリスチャンにとっては死を恐れることはないことを覚えつつ、この恵みをより多くの方に知っていただきたいと願う私たちでありたいと思います。

まとめ

クリスチャンにとって死は恐れるものではなく、むしろ希望です。希望を持ちつつこの地上での別れの痛みに寄り添いましょう。

Q 話し合ってみましょう

1．クリスチャンにとって死は終わりではありません。あなたはそれを信じることができるでしょうか？

2．死について考えることは、あなたの今の生き方にどんな影響を与えると思いますか？